

15. ミステリー・タイムスリップ

各務原市立八木山小学校

6年 上井 元 小川 舞夏 今村 円香
堀 響花 石田 菜月 生駒 佳歩



敦賀市立粟野南小学校

6年 大戸 彩未

六月十一日。今日は、カイトの誕生日。大親友のナナが、お祝いにやって来た。

「カイト、お誕生日おめでとう」

「ありがとう、ナナ」

「どういたしまして。プレゼント持って来たよ」

ナナは持って来たプレゼントを取り出した。そこには、一冊の本が入っていた。

『ミステリーワールド？』

と、カイトが言ったしゅん間、本が光をはなち、ページが勝手に開いた。そして、カイトとナナは本にすいこまれてしまった。

（不思議な世界へようこそ。ここは始まりと終わりの時間。ここから好きな時間を選んでください）

と声が聞こえた。

気づいたら、そこはジャングルだった。目の前にはタワーが建っている。

「ジャングルにタワーなんてあったっけ？」

ナナが言った。カイトが見上げると、

「ナナ、もしかしてこれは……」

そう、それは、ティラノサウルスだった。

「ナナ、にげ……」

言い終わる前にそいつがおそってきた。

「わー！！」

二人はいっせいにさけんでにげた。その時、

「こっちだ！ 早く来い！！」

と声がした。その方向ににげると、なぜかティラノサウルスは追って来なかった。

声の主はネズミだった。

「きみはだれ？」

とカイトが聞くと、そのネズミは、

「おれは、偉大なデルタテリジウム様さ。もうティラノサウルスは追って来ないからだいじょうぶさ。人間がここに来るなんてあぶないさ。早く元の世界にもどった方がいいぞ」

と言った。

「でも、帰り方が分からないんだ」

「それなら、いいことを教えてあげよう。あの火山に飛びこむと元の世界に戻るよ」

「え～、うっそ～。そんなの無理だよ」

「無理だよ。絶対に無理だよ」

カイトとナナが否定した。

「じゃあ、帰れなくてもいいんだ」

「ううん、帰りたいよ。……分かったよ。ナナ、火山に飛びこもう！」

「カイト、本気？」

「もちろんさ。OK？ ナナ」

「うん、OK」

カイトとナナは、飛びこむ決心をして、火山の方に向かった。

そして……、

「せえの」

というかけ声で、火山に飛びこんだ。

気がつくと、カイトとナナは、さっきとはちがう風景の所にいた。

「ここは？」

ナナが聞いた。

カイトは答えなかったが、自分たちの世界ではないということは明らかだった。目の前にはきらきら光る建物が見えた。

「わぁ！　すごくきれいな建物だね。金閣寺みたい。あっ、まげを結った男の人がいるよ」

ナナが楽しそうに言った。

「感心している場合じゃないよ。ぼくたち、タイムスリップに失敗したんだ」

と、カイトは心配そうに言ったが、

「まあ、いいや。どうにかなるさ。でもその前にナナ、おなかが減ってない？」

「あ、うん。たしかにおなかすいたね」

カイトとナナは、タイムスリップしてから、まだ何も口にしていなかった。

「のどがかわいたから、井戸を探そうよ」

「うん。いいよ」

二人は井戸を探して歩き出した。

すると……。

「ごめん。カイト、ナナ、言い忘れた事がある」

と、ネズミのデルタテリジウムが息をはずませながら、追いかけて来た。

「え？　言い忘れたこと？」

二人はきょとんとした。

「そうさ。自分の行きたい世界に行くには、強い意志が必要なのさ。少しでも迷いがあるとうまくいかないんだ。君たちが探していた井戸に飛びこめば、元の世界にもどれるよ」

「ありがとう。もうだいじょうぶだね」

そう言って、二人は井戸を探しに急いだ。

「あっ、ちょっと待ってよ。まだ最後まで言ってないのに……」

しかし、もう遅かった。カイトとナナは井戸を見つけ、迷わず飛びこんでしまったのだ。

気がつくのと、さっきとはまた、ちがう風景が見えた。

「あっ、看板がある。えっと……。え、二千五百三十六年？ ってことは……ぼくたち未来に来ちゃったんだ！？」★

二人はしばらくだまって未来の街を見ていた。

「これが五百年後の地球か……」

「そうみたいだね。でも見たことないものばかりだよ。ちょっと見てこようよ、ナナ」

「うん、行く」

カイトとナナは、タイムスリップが失敗したことも忘れて、夢中になって走って行った。

二人が街で遊んでいると、

「カーイトー、ナーナー」

と、遠くの方で声がした。声の主を探してみると、ネズミのデルタテリジウムだった。

「今度は何？ また何か言い忘れたの？」

と、ナナが少しいじわるっぽく言った。

「言い忘れたんじゃない。君たちが聞かなかったんだよ！」

デルタテリジウムも少しおこって言った。

「おれが言いたかったのは、迷いがなければ、元の世界にもどれるってことなんだ。でも……」

「でも？」

カイトとナナは声をそろえて聞いた。

「でも、必要な物があるんだ。それがないと、ちゃんともどれないのさ」

「それで、未来の地球に来たんだ……」

ナナが、なるほどというようにうなずきながら言った。

「どうすれば元の世界にもどれるの？」

カイトが心配そうに聞いた。

「それには、『時の実』という木の実が必要なのさ。ジャングルにあるらしいぞ」

デルタテリジウムが得意そうに言った。

「あそこのマンホールからタイムスリップできるよ。『時の実』は、丸くて黄色いんだ」

「うん。ありがとう。探してくるね」

カイトとナナは、一人ずつマンホールの中に飛び込んだ。

気が付くと、さっきと同じジャングルの風景が見えた。ちがうところといたら、ティラノサウルスがいないことぐらいだ。

二人は、ジャングルの中を歩き回って探した。

でも、『時の実』は、なかなか見つからなかった。

「ナナ、ちょっと休憩しよう」

「いいよ。あそこのおかげで休もう」

カイトとナナは、太い木の根元に座った。

「ねえ。カイト。これ何だと思う？」

ナナの足元に丸いものが落ちている。

「これって、もしかして、『時の実』じゃない？」

カイトとナナは顔を見合わせた。そして『時の実』をポケットにつめると、走って火山に向かった。

火山の前には、デルタテリジウムが待っていた。

「カイト、ナナ、『時の実』を見つけたんだね。おめでとう。これで、君たちの世界に帰れるよ」

デルタテリジウムは、そう言いながら、小さな袋をわたした。

「これ、おみやげに持って行きなよ。このジャングルにしかない『時の実』だよ」

「ありがとう。デルタテリジウム」

二人はそう言って、火山に飛び込んだ。

気が付くと、二人はカイトの部屋にいた。

「夢だったのかな？」

ナナは言った。

カイトは「ミステリー・ワールド」の本を開いてみた。でも、今度は何も起こらなかった。最初のページに『時の実』の絵があった。

「ナナ、『時の実』の種を植えてみようよ」

「いいよ」

二人は庭に行って種を植えた。またタイムスリップできる日を楽しみにしながら。そんな二人の様子を、木のかげからこっそりと、小さなネズミが見ていた。